

## I へき地・複式教育の黎明

### 全道単級複式連盟結成

北海道のへき地・複式教育は、過酷な自然条件の中にあつて、都市部のそれとは比べものにならない多くのハンディキャップを背負わされていた。したがって、その改善運動は、いろいろな形で行政当局や、地域・父母と教師の積み重ねで行われてきた。

昭和7（1932）年、北海道庁主催で第1回単級複式編制研究大会が開催され、翌8年には札幌師範・旭川師範代用付属（平岸小・神居小）が初めて指定校になった。

それから11年後の昭和19（1944）年には、全道14支庁に単級複式教育研究指定校が設置され、翌20年に単級複式教育研究指定協議会を空知、釧路、渡島の3地区で開催する運びとなった。この年に「単級複式教育」が発行された。このような諸々の活動が全道単級複式連盟（以下「道単連」）結成の契機となった。

道単連が結成されたのは、昭和23（1948）年のことである。同年11月7日には、札幌市において、石狩、空知、後志、胆振等、近隣地区の代表が集まって連盟を結成した。また、同年には年間予算17万円を計上し、全道研究大会を上川管内美深町立楠小学校で開催した。まさに、へき地・複式教育の夜明けである。

この後、道単連の仲間は、単級複式の教育研究と条件整備を車の両輪として、熱心な活動を続けていった。

昭和27（1952）年7月7日に、第1回全国単級複式教育研究大会が北海道十勝地区で開催され、同年10月全道大会が空知地区で開かれたことが契機となり、単複の研究活動はますます高まっていった。

### 全国へき地教育研究連盟への加盟

これらの活動とともに忘れてはならないのは、全国へき地教育研究連盟（以下「全へき連」）の動きである。北海道より4年遅れての連盟の結成だったが、道単連は直ちに加盟、全国の仲間の期待に応えて実践を深め、研究を充実し、条件整備をしていった。全道くまなく研究大会がもたれ、北海道の単級複式教育は急速な高まりを見せた。全道大会、全国大会の歩みの中で、道単連は研究団体としての性格を顕著に示すようになり、組織化も進んだ。

研究テーマは、経営、教科、道徳、特別活動、社会教育、行財政など様々だったが、課題別研究が底流をなしていた。研究の傾向も昭和30（1955）年代は、同単元指導、自学自習、複式学級用教科書の編集、視聴覚教材教具の活用であり、昭和40（1965）年代前半には同内容指導計画、複式指導過程、複式学級用教科書の活用、学習資料、教育機器の利用などに目が向けられていた。

この頃、北海道教育の特色といわれる「自ら学ぶ教育」の理念が示され、北海道立教育研究所から、その原理と原型（原理を追究することによって、理論的にも実践的にも教育現場の範例となるモデル）が打ち出され、複式教育の課題整理について論議を呼んだのも見逃せない教育思潮であった。これは、理論研究というより実践研究であり、児童生徒の自発的な学習方法の体得を徹底させることにより、児童生徒自ら生きて働く力をもつ態度形成が図られるとするものである。

研究の方法としては、「計画（実態把握・仮説設定）—実施（仮説に基づく実践・検証）—実践の記録・評価—再評価」の螺旋型の研究方法がとられた。このような、実践（行動）と研究を有機的に関連づけて進めていく方法論は、道単連研究推進のモデルとなった。